4年連続で中小企業の約半数が給与水準を引き上げ

中小企業の雇用・賃金に関する調査結果
（全国中小企業動向調査・中小企業編 2017年10-12月期特別調査）

○雇用
・2017年12月において、正社員が「不足」と回答した企業割合は、全業種計で58.0%となり、前年（50.2%）から7.8ポイント上昇した。「適正」は37.0%、「過剰」は5.0%となった。業種別にみると、運送業、建設業、情報通信業などで「不足」と回答した割合が高くなっている。

・2017年12月に正社員数を前年から「増加」させた企業割合は30.8%、「減少」させた企業割合は18.7%となった。前年と比べると、「増加」は2.3ポイント上昇、「減少」は1.2ポイント低下した。業種別にみると、情報通信業、製造業、運送業などで「増加」と回答した割合が高くなっている。

○賃金
・2017年12月に正社員の給与水準を前年から「上昇」させた企業割合は、54.5%となり、前年（49.3%）から5.2ポイント上昇した。4年連続で約半数が給与水準を引き上げている。上昇の背景をみると、「自社の業績が改善」（39.8%）の割合が最も高く、次いで「採用が困難」（22.2%）となっている。2018年についても約半数が「上昇」と回答している。

・2017年の賞与（支給月数）を前年から「増加」させた企業割合は、34.5%となった。

・2017年12月の賃金総額を前年から「増加」させた企業割合は59.6%、「減少」は7.2%となった。
[調査の実施要領]

調査時点: 2017年12月中旬
調査対象: 当公庫（中小企業事業）取引先 12,946社
有効回答数: 5,180社 [回答率 40.0 %]

<table>
<thead>
<tr>
<th>業種構成</th>
<th>調査対象</th>
<th>有効回答数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>製造業</td>
<td>5,331社</td>
<td>2,239社 (構成比 43.2 %)</td>
</tr>
<tr>
<td>鉱業</td>
<td>31社</td>
<td>10社 (同 0.2 %)</td>
</tr>
<tr>
<td>建設業</td>
<td>961社</td>
<td>419社 (同 8.1 %)</td>
</tr>
<tr>
<td>運送業（除水運）</td>
<td>712社</td>
<td>312社 (同 6.0 %)</td>
</tr>
<tr>
<td>水運業</td>
<td>166社</td>
<td>79社 (同 1.5 %)</td>
</tr>
<tr>
<td>倉庫業</td>
<td>88社</td>
<td>46社 (同 0.9 %)</td>
</tr>
<tr>
<td>情報通信業</td>
<td>277社</td>
<td>101社 (同 1.9 %)</td>
</tr>
<tr>
<td>ガス供給業</td>
<td>30社</td>
<td>18社 (同 0.3 %)</td>
</tr>
<tr>
<td>不動産業</td>
<td>836社</td>
<td>276社 (同 5.3 %)</td>
</tr>
<tr>
<td>宿泊・飲食サービス業</td>
<td>529社</td>
<td>163社 (同 3.1 %)</td>
</tr>
<tr>
<td>卸売業</td>
<td>1,669社</td>
<td>660社 (同 12.7 %)</td>
</tr>
<tr>
<td>小売業</td>
<td>888社</td>
<td>295社 (同 5.7 %)</td>
</tr>
<tr>
<td>サービス業</td>
<td>1,428社</td>
<td>562社 (同 10.8 %)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（参考）
資本金
100万円未満 | 35社 (構成比 0.7 %) |
同 | 100万〜300万円未満 | 62社 (同 1.2 %) |
同 | 300万〜1,000万円未満 | 382社 (同 7.4 %) |
同 | 1,000万〜5,000万円未満 | 3,414社 (同 65.9 %) |
同 | 5,000万〜1億円未満 | 1,021社 (同 19.7 %) |
同 | 1億〜3億円未満 | 212社 (同 4.1 %) |
同 | 3億円以上 | 54社 (同 1.0 %) |
Ⅰ 雇用
Ⅰ−1 従業員の過不足感

○ 2017年12月における正社員の過不足感をみると、全業種計で、「不足」との回答割合が58.0%となった。「適正」との回答割合は37.0%、「過剰」は5.0%となっている。「不足」の割合は、2016年実績と比べて7.8ポイント上昇した。
○ 業種別では、運送業（76.6%）、建設業（74.1%）、情報通信業（69.3%）などで、「不足」と回答した割合が高い。

図−1 従業員の過不足感

【正社員】

（1）全業種計

<table>
<thead>
<tr>
<th>年度</th>
<th>不足</th>
<th>適正</th>
<th>過剰</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>2014年実績（n=4,539）</td>
<td>44.3</td>
<td>45.6</td>
<td>10.1</td>
</tr>
<tr>
<td>2015年実績（n=3,208）</td>
<td>45.4</td>
<td>45.1</td>
<td>9.5</td>
</tr>
<tr>
<td>2016年実績（n=3,708）</td>
<td>50.2</td>
<td>42.5</td>
<td>7.3</td>
</tr>
<tr>
<td>今回調査（n=3,480）</td>
<td>58.0</td>
<td>37.0</td>
<td>5.0</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（2）業種別（2017年実績）

<table>
<thead>
<tr>
<th>業種</th>
<th>不足</th>
<th>適正</th>
<th>過剰</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>製造業（n=1,599）</td>
<td>57.8</td>
<td>36.4</td>
<td>5.8</td>
</tr>
<tr>
<td>非製造業（n=1,881）</td>
<td>58.2</td>
<td>37.5</td>
<td>4.3</td>
</tr>
<tr>
<td>建設業（n=274）</td>
<td>74.1</td>
<td>24.8</td>
<td>1.1</td>
</tr>
<tr>
<td>運送業（除水運）（n=222）</td>
<td>76.6</td>
<td>22.5</td>
<td>0.9</td>
</tr>
<tr>
<td>水運業（n=46）</td>
<td>60.9</td>
<td>37.0</td>
<td>2.2</td>
</tr>
<tr>
<td>倉庫業（n=38）</td>
<td>60.5</td>
<td>39.5</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>情報通信業（n=75）</td>
<td>69.3</td>
<td>22.7</td>
<td>8.0</td>
</tr>
<tr>
<td>不動産業（n=142）</td>
<td>31.7</td>
<td>64.8</td>
<td>3.5</td>
</tr>
<tr>
<td>宿泊・飲食サービス業（n=111）</td>
<td>65.8</td>
<td>31.5</td>
<td>2.7</td>
</tr>
<tr>
<td>卸売業（n=411）</td>
<td>46.7</td>
<td>46.2</td>
<td>7.1</td>
</tr>
<tr>
<td>小売業（n=185）</td>
<td>62.2</td>
<td>33.5</td>
<td>4.3</td>
</tr>
<tr>
<td>サービス業（n=357）</td>
<td>52.1</td>
<td>41.7</td>
<td>6.2</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）各年12月の従業員数に対する、現在の仕事量やその見通しからみた過不足感。
2017年12月における非正社員の過不足感をみると、全業種計で、「不足」との回答割合が39.6%となった。「適正」との回答割合は56.2％、「過剰」は4.2%となっている。「不足」の割合は、2016年実績と比べて4.5ポイント上昇した。

業種別にみると、宿泊・飲食サービス業（66.1％）、運送業（53.9％）、小売業（49.7％）などで、「不足」と回答した割合が高い。

図-2 従業員の過不足感

【非正社員】

（１）全業種計

<table>
<thead>
<tr>
<th>年度</th>
<th>不足</th>
<th>適正</th>
<th>過剰</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>2014年実績（n=3,231）</td>
<td>29.4</td>
<td>63.7</td>
<td>6.9</td>
</tr>
<tr>
<td>2015年実績（n=2,669）</td>
<td>33.5</td>
<td>60.1</td>
<td>6.4</td>
</tr>
<tr>
<td>2016年実績（n=2,885）</td>
<td>35.1</td>
<td>59.7</td>
<td>5.2</td>
</tr>
<tr>
<td>今回調査（n=2,920）</td>
<td>39.6</td>
<td>56.2</td>
<td>4.2</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）各年12月の従業員数に対する、現在の仕事量やその見通しからみた過不足感。
1-2 人手不足の影響と対応

○ 人手不足の影響についてみると、「売上機会を逸失」（33.1%）と回答した企業割合が最も高く、次いで「残業代、外注費等のコストが増加し、利益が減少」（30.9%）、「納期の長期化、遅延の発生」（15.4%）となっている。
○ 人手不足への対応についてみると、「従業員の多能工化」（42.1%）が最も高く、次いで「残業を増加」（38.7%）、「業務の一部を外注化」（36.1%）となっている。

図-3 人手不足の影響

図-4 人手不足への対応

＜参考＞ 業種別にみた人手不足の影響（上位5業種）

(1) 「売上機会を逸失」
(2) 「残業代、外注費等のコストが増加し、利益が減少」

(注) 斜体は製造業を示している。

(1) 「売上機会を逸失」

<table>
<thead>
<tr>
<th>業種</th>
<th>割合(%)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>運送業(除水運)</td>
<td>56.8</td>
</tr>
<tr>
<td>情報通信業</td>
<td>50.9</td>
</tr>
<tr>
<td>建設業</td>
<td>50.3</td>
</tr>
<tr>
<td>小売業</td>
<td>46.7</td>
</tr>
<tr>
<td>不動産業</td>
<td>44.4</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(注) 1 様々な製品を示している。

(2) 「残業代、外注費等のコストが増加し、利益が減少」

<table>
<thead>
<tr>
<th>業種</th>
<th>割合(%)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>運送業(除水運)</td>
<td>48.7</td>
</tr>
<tr>
<td>建設業</td>
<td>52.0</td>
</tr>
<tr>
<td>小売業</td>
<td>44.8</td>
</tr>
<tr>
<td>不動産業</td>
<td>42.1</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(注) 1 様々な製品を示している。

(2) 複数回答（最大二つまで）のため、合計は100%を超える。
I - 3　従業員数の増減

〇 2017年12月の正社員数の増減をみると、「増加」と回答した企業は30.8%となり、2016年実績（28.5%）と比べて2.3ポイント上昇した。また、「減少」は18.7%となり、2016年実績（19.9%）と比べて1.2ポイント低下した。
〇 業種別にみると、情報通信業（40.0%）、製造業（33.9%）、運送業（32.7%）などで「増加」と回答した割合が高い。

図-5　正社員数の増減（全業種計）

(1) 全業種計

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>増加</th>
<th>変わらない</th>
<th>減少</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>2013年実績（n=6,174）</td>
<td>31.5</td>
<td>51.4</td>
<td>17.1</td>
</tr>
<tr>
<td>2014年実績（n=4,545）</td>
<td>38.3</td>
<td>44.2</td>
<td>17.6</td>
</tr>
<tr>
<td>2015年実績（n=5,036）</td>
<td>30.9</td>
<td>51.1</td>
<td>18.0</td>
</tr>
<tr>
<td>2016年実績（n=5,085）</td>
<td>28.5</td>
<td>51.6</td>
<td>19.9</td>
</tr>
<tr>
<td>2017年実績（n=5,085）</td>
<td>30.8</td>
<td>50.5</td>
<td>18.7</td>
</tr>
<tr>
<td>2018年見通し（n=5,003）</td>
<td>36.8</td>
<td>55.6</td>
<td>7.6</td>
</tr>
</tbody>
</table>

今回調査

(2) 業種別（2017年実績）

<table>
<thead>
<tr>
<th>業種</th>
<th>増加</th>
<th>変わらない</th>
<th>減少</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>製造業(n=2,230)</td>
<td>33.9</td>
<td>47.0</td>
<td>19.1</td>
</tr>
<tr>
<td>非製造業(n=2,912)</td>
<td>28.4</td>
<td>53.2</td>
<td>18.4</td>
</tr>
<tr>
<td>建設業(n=412)</td>
<td>28.4</td>
<td>53.2</td>
<td>18.4</td>
</tr>
<tr>
<td>運送業(除水運)(n=309)</td>
<td>32.7</td>
<td>43.4</td>
<td>23.9</td>
</tr>
<tr>
<td>水運業(n=78)</td>
<td>23.1</td>
<td>60.3</td>
<td>16.7</td>
</tr>
<tr>
<td>倉庫業(n=46)</td>
<td>28.1</td>
<td>58.7</td>
<td>15.2</td>
</tr>
<tr>
<td>情報通信業(n=100)</td>
<td>40.0</td>
<td>45.0</td>
<td>15.0</td>
</tr>
<tr>
<td>不動産業(n=208)</td>
<td>14.9</td>
<td>76.5</td>
<td>8.6</td>
</tr>
<tr>
<td>宿泊・飲食サービス業(n=162)</td>
<td>22.8</td>
<td>44.4</td>
<td>32.7</td>
</tr>
<tr>
<td>卸売業(n=655)</td>
<td>29.9</td>
<td>53.9</td>
<td>16.2</td>
</tr>
<tr>
<td>小売業(n=294)</td>
<td>29.9</td>
<td>47.3</td>
<td>22.8</td>
</tr>
<tr>
<td>サービス業(n=560)</td>
<td>31.3</td>
<td>51.6</td>
<td>17.1</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）実績は当該年12月、見通しは翌年12月における従業員数の増減を、それぞれ前年同月比で質問したもの。
〇 2017年12月の非正社員数の増減をみると、「増加」と回答した企業は20.5％となり、2016年実績（22.5％）と比べて2.0ポイント低下した。また、「減少」と回答した企業は13.3％となり、2016年実績（12.0％）と比べて1.3ポイント上昇した。
〇 業種別にみると、宿泊・飲食サービス業（27.0％）、小売業（23.9％）、製造業（22.4％）などで「増加」と回答した割合が高い。

図-6 非正社員数の増減

（1）全国産計

<table>
<thead>
<tr>
<th>年度</th>
<th>増加</th>
<th>変わらない</th>
<th>減少</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>2014年実績（n=3,297）</td>
<td>28.0</td>
<td>55.4</td>
<td>16.7</td>
</tr>
<tr>
<td>2015年実績（n=4,202）</td>
<td>20.3</td>
<td>66.8</td>
<td>12.9</td>
</tr>
<tr>
<td>2016年実績（n=4,416）</td>
<td>22.5</td>
<td>65.5</td>
<td>12.0</td>
</tr>
<tr>
<td>2017年実績（n=4,546）</td>
<td>20.5</td>
<td>66.2</td>
<td>13.3</td>
</tr>
<tr>
<td>2018年見通し（n=4,263）</td>
<td>19.7</td>
<td>71.5</td>
<td>8.8</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（参考）
2016年調査における2017年見通し（n=4,215）

<table>
<thead>
<tr>
<th>2016年調査</th>
<th>増加</th>
<th>変わらない</th>
<th>減少</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>18.4</td>
<td>72.4</td>
<td>9.2</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

（2）業種別（2017年実績）

<table>
<thead>
<tr>
<th>業種</th>
<th>増加</th>
<th>変わらない</th>
<th>減少</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>製造業（n=1,960）</td>
<td>22.4</td>
<td>63.4</td>
<td>14.1</td>
</tr>
<tr>
<td>非製造業（n=2,386）</td>
<td>19.0</td>
<td>68.4</td>
<td>12.6</td>
</tr>
<tr>
<td>建設業（n=304）</td>
<td>15.1</td>
<td>77.0</td>
<td>7.9</td>
</tr>
<tr>
<td>交通（除水運）（n=262）</td>
<td>18.3</td>
<td>66.0</td>
<td>15.6</td>
</tr>
<tr>
<td>水運業（n=44）</td>
<td>20.5</td>
<td>79.5</td>
<td>4.0</td>
</tr>
<tr>
<td>倉庫業（n=41）</td>
<td>22.0</td>
<td>58.5</td>
<td>19.5</td>
</tr>
<tr>
<td>情報通信業（n=88）</td>
<td>13.6</td>
<td>75.0</td>
<td>11.4</td>
</tr>
<tr>
<td>不動産業（n=204）</td>
<td>11.8</td>
<td>82.8</td>
<td>5.4</td>
</tr>
<tr>
<td>宿泊・飲食サービス業（n=159）</td>
<td>27.9</td>
<td>50.3</td>
<td>22.6</td>
</tr>
<tr>
<td>卸売業（n=525）</td>
<td>17.7</td>
<td>72.0</td>
<td>10.3</td>
</tr>
<tr>
<td>小売業（n=264）</td>
<td>23.9</td>
<td>59.1</td>
<td>17.0</td>
</tr>
<tr>
<td>サービス業（n=475）</td>
<td>21.9</td>
<td>63.4</td>
<td>14.7</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）実績は当該年12月、見通しは翌年12月における従業員数の増減を、それぞれ前年同月比で質問したもの。
従業員数の増加理由をみると、正社員では「将来の人手不足への備え」が53.7％と最も高くなっており、長期的な観点から人材の確保・育成に取り組む姿勢がうかがえる。一方、正社員、非正社員ともに「受注・販売が増加」と回答した割合が高くなっており、足元の景気回復の影響もみられる。

減少理由をみると、正社員では「転職者の補充人員を募集したが採用できず」が54.9％と最も高くなっており、労働需給のタイト化が進むなか、必要な人材を補充できない企業が多く存在することがうかがえる。

図-7 従業員数の増減理由
(1)「増加」理由

<table>
<thead>
<tr>
<th>増加理由</th>
<th>正社員</th>
<th>非正社員</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>将来の人手不足への備え</td>
<td>27.4</td>
<td>42.2</td>
</tr>
<tr>
<td>受注・販売が増加</td>
<td>26.6</td>
<td>45.1</td>
</tr>
<tr>
<td>受注・販売が増加見込み</td>
<td>24.0</td>
<td>14.4</td>
</tr>
<tr>
<td>技能継承のため(従業員の高齢化への対応)</td>
<td>7.0</td>
<td>10.0</td>
</tr>
<tr>
<td>新事業・新分野に進出</td>
<td>18.1</td>
<td>20.0</td>
</tr>
<tr>
<td>工場・店舗・営業所等新設</td>
<td>15.5</td>
<td>14.4</td>
</tr>
<tr>
<td>非正社員を正社員に登用</td>
<td>13.9</td>
<td>14.0</td>
</tr>
<tr>
<td>新技術・設備導入への対応</td>
<td>11.6</td>
<td>12.0</td>
</tr>
<tr>
<td>定年を迎えた正社員を非正社員として再雇用</td>
<td>7.7</td>
<td>14.2</td>
</tr>
<tr>
<td>業務の一部を内製化</td>
<td>5.2</td>
<td>6.0</td>
</tr>
<tr>
<td>出産、育児休業等を取得する従業員の補完</td>
<td>3.4</td>
<td>5.0</td>
</tr>
<tr>
<td>正社員の業務を非正社員に置き換えた</td>
<td>13.1</td>
<td>14.7</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>11.9</td>
<td>14.7</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(注) 図-5、6の2017年実績で「増加」「減少」を回答した企業に質問したもの。複数回答(最大三つまで)のため、合計は100％を超える。
Ⅱ賃金
Ⅱ-1正社員の給与水準

○2017年12月の正社員の給与水準をみると、前年と比べて「上昇」と回答した企業割合は、54.5%となった。4年連続で中小企業の約半数が、正社員の給与水準を引き上げている。
○2018年見通しをみると、前年より「上昇」とする回答した企業割合は50.3%と、引き続き半数を上回っている。
○業種別にみると、宿泊・飲食サービス業（59.1%）、小売業（58.9%）などで「上昇」と回答した割合が高くなっている。

図-8 正社員の給与水準

（1）業種別

<table>
<thead>
<tr>
<th>業種</th>
<th>上昇</th>
<th>ほとんど変わらない</th>
<th>低下</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>製造業</td>
<td>58.8</td>
<td>40.9</td>
<td>0.6</td>
</tr>
<tr>
<td>非製造業</td>
<td>51.4</td>
<td>47.9</td>
<td>0.6</td>
</tr>
<tr>
<td>建設業</td>
<td>58.7</td>
<td>42.7</td>
<td>0.5</td>
</tr>
<tr>
<td>運送業（除水運）</td>
<td>49.8</td>
<td>50.2</td>
<td>0.5</td>
</tr>
<tr>
<td>水運業</td>
<td>48.6</td>
<td>51.4</td>
<td>0.4</td>
</tr>
<tr>
<td>倉庫業</td>
<td>44.4</td>
<td>55.6</td>
<td>0.4</td>
</tr>
<tr>
<td>情報通信業</td>
<td>51.0</td>
<td>46.9</td>
<td>2.1</td>
</tr>
<tr>
<td>不動産業</td>
<td>28.6</td>
<td>70.2</td>
<td>1.2</td>
</tr>
<tr>
<td>宿泊・飲食サービス業</td>
<td>59.1</td>
<td>40.3</td>
<td>0.7</td>
</tr>
<tr>
<td>卸売業</td>
<td>51.2</td>
<td>47.9</td>
<td>0.9</td>
</tr>
<tr>
<td>小売業</td>
<td>58.9</td>
<td>40.4</td>
<td>0.7</td>
</tr>
<tr>
<td>サービス業</td>
<td>55.9</td>
<td>43.9</td>
<td>0.2</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(注)1実績は当該年12月、見通しは翌年12月における正社員の給与水準を、前年同月比で質問したもの。
2定期昇給や昇格・降格による変動を除いた基本給の水準を質問している。
○ 正社員の給与水準上昇の背景についてみると、全業種計では、「自社の業績が改善」と回答した企業割合が39.8%と最も高く、次いで「採用が困難」（22.2%）、「同業他社の賃金動向」（12.2%）が続いた。
○ 業種別にみると、「自社の業績が改善」と回答した企業割合は、生産用機械（58.4%）、電子部品・デバイス（58.3%）などで高い。「採用が困難」は、水運業（38.2%）、宿泊・飲食サービス業（37.2%）などで高い。

図-9 正社員の給与水準上昇の背景

＜参考＞ 業種別にみた給与水準上昇の背景(2017年実績)

<table>
<thead>
<tr>
<th>業種別</th>
<th>同比上昇割合(%)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>生産用機械</td>
<td>58.4</td>
</tr>
<tr>
<td>電子部品・デバイス</td>
<td>58.3</td>
</tr>
<tr>
<td>不動産業</td>
<td>56.7</td>
</tr>
<tr>
<td>電気機械</td>
<td>51.4</td>
</tr>
<tr>
<td>金属製品</td>
<td>50.0</td>
</tr>
<tr>
<td>業務用機械</td>
<td>50.0</td>
</tr>
<tr>
<td>建設業</td>
<td>48.5</td>
</tr>
<tr>
<td>はん用機械</td>
<td>47.9</td>
</tr>
<tr>
<td>重電業</td>
<td>47.8</td>
</tr>
<tr>
<td>鉄鋼</td>
<td>46.3</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(注) 斜体は製造業を示している。
**II－2 賞 与**

○ 2017年の賞与の支給月数をみると、前年と比べて「増加」と回答した企業割合が34.5%、「変わらない」が49.7%、「減少」が10.3%となっている。
○ 業種別にみると、前年と比べて「増加」と回答した企業割合は、製造業（39.3%）、建設業（37.0%）などで高い。

**図－10 賞 与**

（1）企業種計

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>増加</th>
<th>変わらない</th>
<th>減少</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>2013年実績（n=5,587）</td>
<td>29.3</td>
<td>56.0</td>
<td>14.7</td>
</tr>
<tr>
<td>2014年実績（n=4,507）</td>
<td>35.7</td>
<td>45.2</td>
<td>12.0</td>
</tr>
<tr>
<td>2015年実績（n=3,372）</td>
<td>33.1</td>
<td>49.6</td>
<td>12.3</td>
</tr>
<tr>
<td>2016年実績（n=3,539）</td>
<td>31.0</td>
<td>50.8</td>
<td>12.5</td>
</tr>
</tbody>
</table>

今回調査（n=3,514）

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>増加</th>
<th>変わらない</th>
<th>減少</th>
<th>支給せず</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>2017年実績</td>
<td>34.5</td>
<td>49.7</td>
<td>10.3</td>
<td>5.5</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（単位：%）

（2）業種別（2017年実績）

<table>
<thead>
<tr>
<th>増加</th>
<th>変わらない</th>
<th>減少</th>
<th>支給せず</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>製造業（n=1,591）</td>
<td>39.3</td>
<td>44.8</td>
<td>12.3</td>
</tr>
<tr>
<td>非製造業（n=1,923）</td>
<td>30.6</td>
<td>53.8</td>
<td>8.6</td>
</tr>
<tr>
<td>建設業（n=281）</td>
<td>37.0</td>
<td>50.9</td>
<td>9.3</td>
</tr>
<tr>
<td>運送業（除水運）（n=222）</td>
<td>25.9</td>
<td>60.8</td>
<td>6.8</td>
</tr>
<tr>
<td>水運業（n=51）</td>
<td>45.3</td>
<td>62.7</td>
<td>2.0</td>
</tr>
<tr>
<td>倉庫業（n=39）</td>
<td>35.9</td>
<td>53.8</td>
<td>7.7</td>
</tr>
<tr>
<td>情報通信業（n=74）</td>
<td>27.0</td>
<td>55.4</td>
<td>5.4</td>
</tr>
<tr>
<td>不動産業（n=143）</td>
<td>21.0</td>
<td>61.5</td>
<td>14.7</td>
</tr>
<tr>
<td>宿泊・飲食サービス業（n=100）</td>
<td>28.0</td>
<td>46.0</td>
<td>14.0</td>
</tr>
<tr>
<td>卸売業（n=442）</td>
<td>33.7</td>
<td>50.5</td>
<td>11.1</td>
</tr>
<tr>
<td>小売業（n=200）</td>
<td>30.0</td>
<td>52.5</td>
<td>10.5</td>
</tr>
<tr>
<td>サービス業（n=350）</td>
<td>31.4</td>
<td>53.1</td>
<td>7.7</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（単位：%）

＜参考＞ 夏季・冬季別

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>増加</th>
<th>変わらない</th>
<th>減少</th>
<th>支給せず</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>2017年実績（夏季）（n=5,587）</td>
<td>32.7</td>
<td>54.4</td>
<td>7.1</td>
<td>5.9</td>
</tr>
<tr>
<td>2017年実績（冬季）（n=5,587）</td>
<td>35.3</td>
<td>50.0</td>
<td>9.5</td>
<td>5.2</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（単位：%）
Ⅱ-3 賃金総額

○ 2017年12月の賃金総額をみると、前年と比べて「増加」したとの回答割合が59.6％と最も高く、「ほとんど変わらない」が33.2％、「減少」が7.2％となっている。2016年実績と比べて、「増加」の割合が上昇し、「減少」の割合が低下している。
○ 2018年の見通しをみると、55.3％の企業が「増加」すると回答している。「減少」は、3.2％となっている。

図-11 賃金総額

（1）全体種計

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>増加</th>
<th>ほとんど変わらない</th>
<th>減少</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>2013年実績（n=5,989）</td>
<td>46.0</td>
<td>43.8</td>
<td>10.1</td>
</tr>
<tr>
<td>2014年実績（n=4,670）</td>
<td>55.2</td>
<td>37.1</td>
<td>7.7</td>
</tr>
<tr>
<td>2015年実績（n=3,699）</td>
<td>54.3</td>
<td>38.2</td>
<td>9.2</td>
</tr>
<tr>
<td>2016年実績（n=3,878）</td>
<td>52.5</td>
<td>37.5</td>
<td>10.0</td>
</tr>
<tr>
<td>2017年実績（n=3,791）</td>
<td>59.6</td>
<td>33.2</td>
<td>7.2</td>
</tr>
</tbody>
</table>

今回調査

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>増加</th>
<th>ほとんど変わらない</th>
<th>減少</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>2018年見通し（n=3,776）</td>
<td>55.3</td>
<td>41.5</td>
<td>3.2</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（参考）

2016年調査における2017年見通し（n=3,665）

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>増加</th>
<th>ほとんど変わらない</th>
<th>減少</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>2016年実績（n=5,989）</td>
<td>48.8</td>
<td>46.7</td>
<td>4.5</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（2）業種別（2017年実績）

<table>
<thead>
<tr>
<th>業種</th>
<th>増加</th>
<th>ほとんど変わらない</th>
<th>減少</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>製造業（n=1,718）</td>
<td>61.3</td>
<td>31.3</td>
<td>7.4</td>
</tr>
<tr>
<td>非製造業（n=2,073）</td>
<td>58.2</td>
<td>34.8</td>
<td>7.0</td>
</tr>
<tr>
<td>建設業（n=301）</td>
<td>61.1</td>
<td>34.9</td>
<td>4.0</td>
</tr>
<tr>
<td>運送業（除水運）（n=233）</td>
<td>57.9</td>
<td>37.8</td>
<td>4.3</td>
</tr>
<tr>
<td>水運業（n=56）</td>
<td>57.1</td>
<td>39.3</td>
<td>3.6</td>
</tr>
<tr>
<td>倉庫業（n=43）</td>
<td>48.8</td>
<td>37.2</td>
<td>14.0</td>
</tr>
<tr>
<td>情報通信業（n=80）</td>
<td>60.0</td>
<td>31.3</td>
<td>8.8</td>
</tr>
<tr>
<td>不動産業（n=143）</td>
<td>35.7</td>
<td>58.0</td>
<td>6.3</td>
</tr>
<tr>
<td>宿泊・飲食サービス業（n=110）</td>
<td>63.6</td>
<td>22.7</td>
<td>13.6</td>
</tr>
<tr>
<td>卸売業（n=473）</td>
<td>58.1</td>
<td>33.2</td>
<td>8.7</td>
</tr>
<tr>
<td>小売業（n=215）</td>
<td>62.8</td>
<td>28.8</td>
<td>8.4</td>
</tr>
<tr>
<td>サービス業（n=396）</td>
<td>62.1</td>
<td>31.8</td>
<td>6.1</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）1 「賃金総額」は、従業員全員の基本給、残業手当、社会保険料等を含む人件費の総額。
2 実績は当該年12月、見通しは翌年12月における賃金総額について、前年同月比で質問したもの。